

また太った
また歳をとった
変化と言えは
それくらい

仕事一筋で
まじめに働いて

恋愛なんて
縁もなかった



毎日
同じ...か

いっ
ぱい



そんな
ある一夜

あら...

お巡りさんと...

子供...か

???

??

!?

あ...お母さん...

あ...お母さん...

おまねさん
おまねさん...

おまねさん...
子供を一人で待たせるのは

早く帰るよ

私の性格が悪かった。あの場で
目立つ事を嫌い、その場から
家族のフリをして逃げてしまっ
た
見ず知らずの子供をつれて...

とりあえず話を聞いてみる

お母さん

「飯食べよーよ」



『私』がお母さん…

それ以上の情報が出ない
名前も家も父親も不明

おいしい♪



お母さん…

私…

君はお母さんじゃ
ないの？

あ、

どこ行くの？！

お母さん…



僕がまだ一人で入れ
ないの？



あんなに…

だから騒がないで…



独身生活が長かったから
子供が一人居るだけで
不思議な楽しさを感じていた

刺激の無い日常

記憶に残らない
日常...

目が
しみる...

うっ
うっ

過ぎた日々の長さを

知るは数字のみ...

だけど今は？



あの子が何をした

何を食べた

そこにいるなあ...

何を
しおげた...

寝る前のトイレ

ぐらいてんで

行きなさいよ...

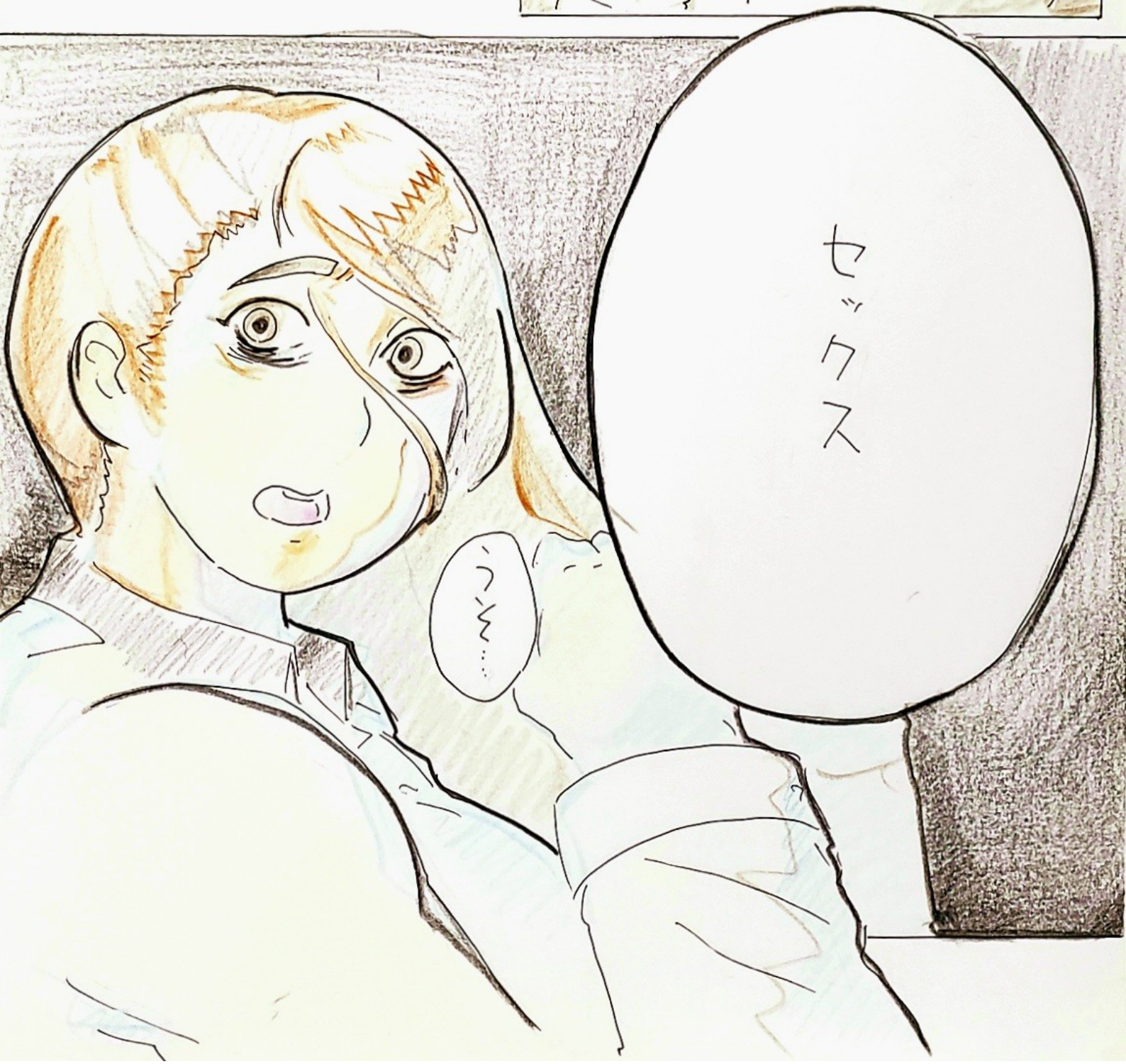
記憶が溢れていく





フッフ、
何だ、たまたまいふ...

眠れない時の
おまじないしこよう



セックス

うん...

もっと日常を大切に
生きればよかった



もっと直ぐに

これは...
親子でしゃ
ダメなの
えー!?

私を困らせないで...
お願いだから...

もっと行動的に

セックスしたい
セックスしたい

私達...
親子なんじゃない?



キミが
どう思ったの?

もっと記憶に残る
生き方をしていければ

本当は
ダメなんだよ?



母さんと
セックス
するなんて...

今日という一日なんて
容易く否定出来たんだ

キミは
悪い子だ

でも…
母さんが教えて
くれたんだよ？

だが、空箱の様な形だけの
記憶にははがれたものを
抱む力はなかった

どうなの…？
母さんが悪いの…？

だって
もう止めない

今の私が
まさにそれだ

キミは悪く
ないんだもの…



ん...

入れるよ
母さん

母さん

お母さん...

お母さん...
動くよ...

呼ばれる度に
記憶してゆく
母というのは

始まった...

私
なのだと

いぢぢと母である
事が日常へと変わり
体が震えはじめた

母さん...

母さん...
言葉ないで...

母と息子という背徳感...
日さんと言われる度に後悔と
罪悪感に体が震え脱力した
なのに体は悦びを頭へ伝えた
まるで抜けた力を全て快感へ
変えてしまったかの様だ



後ろ…
後ろから…
おねがい…

母さん、

出る、

外に出しなさい

内は
ダメよ、

顔を背け

男と女だったのだと
頭が迷い始めたが…
『母さん』と声をかけられて
ずるずると現実へと戻る度
全身から油汗が吹き出た

子供…
出来ちゃう…

不安も興奮も混ざり
嫌でも心臓を狂わせる

お母さんのお母さんは

え…？

過去の私を
否定する

もう…
終わり…？

今の私の
代弁者

満ちたおっぱい
私は何度も瞬を振った

何も言わないおっぱいを見て
過去の私がどんな母だったか
容易に想像出来てしまう

なさけない母だから
母として振る舞った

ゴメンね...
こんな垂したら
寝れないね

ごも...
僕、うれしいよ



お母さん...

僕はお母さんの
子供で
おっぱいみた

なんて事を
してしまっただのか

子供を裏切り、犯したのに
息子は私にありがとうと

ごめんなさい…私…

立派なお母さんになるからな

極まった背徳感が全身を襲う
心が高揚し続けた果てに
まるで心臓が射精したかの様に
脈打つ度に絶頂を繰り返す



今の私は母であること
息子がいること

今日という一日が日常だと
信じれた事がうれしかった

